

---

# 魔導師の林檎

ZOY

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔導師の林檎

### 【著者名】

NOY

### 【あらすじ】

ある魔導師と林檎が好きな女の子の話。悲しくて優しい恋の話。

## 第一話

「ねえ、おとひわせ。わたしがまだ眠たくないわ」

布団の端から顔をのぞかせ、黙々とこねる少女に父は苦笑した。  
枕の上、ふわりと広がった少女の栗色の髪を大きな手が優しくなでる。

「それなら、ひとつだけ。お話をしようつか」

「どんなお話?」

年を重ねるごとに母親に似ていぐ少女を見て、父はゆっくりと視線を落とした。

「ある魔導師と林檎が好きな女の子の話

「恋のお話?」

「そう、恋の話。悲しくて優しい恋の話」

\* \* \* \*

くるり、くるり、くるり。

あざやかなドレスの裾が音楽にあわせて弧を描く。

張り付けられた笑顔、お手本通りの社交辞令ばかりがあふれる舞踏会の夜。

そんな王族の日常を背にルージュは眠る少年を見つめていた。

誰もいない薄暗い中庭。

その片隅にある立派な林檎の樹に身をあずけ、少年はぴくりもと動かない。

ただただ、瞳を閉ざし座していた。

「ねえ、あなた。こんな所でなにしているの？」

王宮の中の騒音とは対照的に静寂に支配された中庭にルージュの声はほどよく響いた。

しかしそれつきり、辺りは再び静けさに包まれた。  
手について籠をそつと端に置き、腰を折って少年の顔を覗き込んでみるがやはり返事はない。

足元をふわり、夜風が通り過ぎていく。

「ねえ、こんな所で寝ていたら風邪をひきますよ

もう一度声をかけ反応が無いのを確認すると、ルージュは少年をまじまじと観察した。

透き通りのように白い肌に白銀の髪、整った顔立ち。  
まるで雪の妖精みたい、ルージュは誰にも聞こえぬ咳きを落とした。  
ふれたら消えてしまいそう、とも。

月夜に照らされた美しい白銀の髪にルージュはそっと手を伸ばした。  
儂い彼を確認するように。消えてしまわぬように。

しかしルージュの指が彼に触れたことはなかった。

寝ていたはずの少年がルージュの手首を捕えたからだ。

少年はゆっくり目を開くと、鋭い視線をルージュに投げた。

そして高揚のない声で一言だけ呟いた。誰だ、と。

「んばんは妖精>フェータさん、わたしはルージュ。ルージュ・  
クライネファーー」

ルージュはにっこり笑つて答えてみせた。

少年が眉をよせたのにも気づかぬふりをして。

「……フェータ？」

「あなたのお名前しらないから。妖精>フェータってあなたにぴ  
つたりでしょ?」

少年は不機嫌さを隠そつともせず、さらに深く眉間にしわを刻む。  
ルージュはその様子を不思議そうにみつめていた。

ルージュのまわりには彼のように感情をそのまま顔に出す人間など  
いなかつたからだ。  
作り笑いに、あいそう笑い。王城での生活には偽物ばかりがこころが  
つていた。

「……ジゼル・シルフィード」

夜風とともに告げられた名にルージュは瞳をまたかせた。

「ジゼルさん、それがあなたの名前? 素敵です、とても」

もう一度。その名を口にしてみる。ジセル。ジゼル・シルフォード。

シルフォード。それは帝国の名。  
大海の向こうにある大国の名。  
光の女神に守られし土地。

シルフォード。その名をラストネームにもつ彼はきっと。

そこまで考えてルージュは頭を振った。  
少しだけ肌寒さの残るこの凜とした夜には、王宮での日常全てが無  
粋に思えた。

「そうだわ。ねえ、ジゼルさんは林檎はお好きですか？」

突然話題を変えたルージュに、彼は少しだけ片眉をあげた。  
そんな彼の様子を気にすることなく、ルージュは横に置いてあつた  
籠の中身をじそじそと取り出した。

手のひらの上にはひとつ、真っ赤な林檎。

林檎、お好きですか？ともう一度言えば、ああといつ短い返事が返  
つてくる。

肯定の意を確認すると、ルージュはそつと彼の手に林檎を握らせた。

「ならばどうぞ、お召し上がりになつてください。ジゼルさんは少  
しだけ栄養が偏った生活をしているように思えます。林檎は万能薬  
と昔から言われていて、特に食生活に問題がある方にはおすすめな  
んです」

彼はちらりと視線を横に流す。その先には、今なお繰り広げられる  
舞踏会の光。

そして、あの贅沢な料理に飽きたら、と言つた。

「是非そつしてください。わたしこれでも王宮に仕える縁へグリュ  
ーンくの魔術師なんですよ」

自慢げに胸を張るルージュに、彼は苦笑した。

「緑へグリーンへ？ 治癒の魔術師に勧められたとなると食べないわけにはいかないな」

「やつです。緑を纏う者の助言です。せひんと全部食べて下さーね」

彼がわかつたと頷けば、ルージュは満足そうに笑った。

彼は手の中の林檎に目線を落とし、林檎をひと撫でしてから呟いた。  
ぽつりと、本当に小さな声で、君は普通だな、と。

ルージュの耳にはその小さな一言がしつかり届いていたようで、確かにわたしは絶世の美女ではないしお料理も飛びぬけてできるわけじゃないけど女性に対して失礼です、と言しながら頬をふくらませた。

彼は一瞬 目を開いた。ルージュが、普通と言つ言葉を彼の意図したこととは違う意味でとらえたからだ。  
だがすぐに、彼はふつと噴き出した。

「謝る」

そう言ってほほ笑んだ彼はまさにフェータのように美しかった。  
あの夜の彼をルージュは忘れない。ずっと、ずっと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0056z/>

---

魔導師の林檎

2011年11月30日15時53分発行